

〔富岡鉄斎と近代日本画によせて〕

富岡鉄斎筆「魚藻図」をめぐって

大和文華館は開館した翌年の昭和36年に、愛媛県松山市三津浜の近藤家から、富岡鉄斎の48件の絵画、書蹟と98通の書簡を譲り受けました。鉄斎は明治5年(1872)に、愛媛県浮穴郡豊田村(砥部町)出身の佐々木春子(後妻)を迎え、松山市の近辺に地縁ができたと思われます。当初、鉄斎は海運業、旅館を営む石崎家を訪れています。近藤家は代々、文太郎を襲名し、「今文」の屋号の海産物、乾物問屋を営んでおり、当時の当主、文太郎氏は石崎家の番頭でした。大和文華館の近藤家旧蔵作品のなかで、最も制作年代が遡る作品は明治18年1月2日の年記がある「車海老図」(図1)ですから、鉄斎の五十歳頃から、鉄斎は石崎家との交際を通して、近藤氏とも親密になっていったようです。以後、鉄斎と近藤家との交流は40年に渡って続きます。

「車海老図」は「近藤氏の恵まれしをよこひて取りあえず」と記されるように、近藤氏から贈られた車海老を描いた作品です。近藤氏は鯛、鯉、鰻、太刀魚、穴子、海産物をはじめ、竹輪や蒲鉾、するめ、緋燕や素麺など、折々に海産物や地元

名産品を鉄斎に贈っています。近藤家に所蔵されていた作品は、購入されたのではなく、鉄斎が近藤氏の日々の厚情に応えて描いたものがほとんどです。

鉄斎書簡には、鉄斎自身だけではなく、妻の春子に関する近況もしばしば報告されています。例えば、明治24年1月12日付の書簡には、「尚旧年愚妻大病漸快気ニ相運候 一同喜悦申居毎度御尋忝存候」と記され、前年に春子が大病を患い、近藤氏が度々様子を尋ねていたことがわかります。この病は、前年の11月13日付の書簡から、痛風であったようです。その後、明治24年3月20日付の書簡で、「昨年来荆妻大患発ニ危険に陥り候処高庇漸全癒致ヤレヤレト此頃安心ニ及候」と、ようやく全快したことを知らせています。

鉄斎にとって、近藤氏に贈る絵画は、書簡と同様に、無事を伝える証しでもありました。通常の山水画では、画中に一人の人物を絵画世界の主人公のように描きますが、近藤氏に贈った山水画には、画中に並んで座る二人の人物を描く作品が多くあります。特に、「名月図」(大

正5年・81歳)と「掃蕩俗人図」(大正7年・85歳)では、向かって右に年老いた男性、左に年老いた女性が対座しているように見えます。おそらく、この二人は鉄斎夫妻でしょう。画中に自分たちの姿を描いて、遠方の友人である近藤氏との対面に代えているようです。

鉄斎書簡には、鉄斎の身辺で起こった様々な出来事が記され、作品が制作された背景を知ることができます。大正3年9月3日付の書簡には、「本年之大暑ニハ大弱り七月始より当九月迄揮毫一般謝絶来入謝絶一意閑臥嬾眠気儘ニ養生致し漸ク今日迄乍弱無事ニ生活致候」と記しており、大正3年の夏は猛暑だったようです。7月、8月の二ヶ月間は作品の制作依頼も客人の訪問も謝絶したほどですから、既に79歳の鉄斎には、よほど辛かったのでしょう。次いで、「今日久々ニテ名紙取出し二葉得意の連筆致候 右今日此二葉貴家へ進上致候」と記しています。漸く回復し、久々に描いた作品を進上しますということです。この際に、近藤氏に贈った「二葉得意の連筆」は「寿老図」と「魚藻」(図2)です。「寿老図」は幸せを運ぶ神である寿老、「魚藻図」には、水草の間をゆったりと泳ぐ二匹の魚を描いています。ともに、潤いのある墨痕鮮やかに、筆の運びを楽しむように描かれています。いわば、これらの作品は鉄斎の快気祝です。久々に筆をとる事ができた鉄斎の渴きを癒した喜びが伝わってきます。おそらく、「寿老図」の寿老の笑顔は、鉄斎自身の笑顔でしょう。一般的には、「魚藻図」は繁栄を象徴する吉祥画ですが、この作品では、二匹の魚の顔を描き分けています。髭を伸ばし、目玉が大きな一匹のとはけた表情は、鉄斎自身の顔を思い出させます。そうすると、後ろのおおらかな表情の一匹

は春子夫人でしょう。この作品では、山水図に夫婦の姿を描き込むように、二匹の魚に夫婦の姿を重ねて、近藤氏へ贈られています。なお、「魚藻図」には、「魚在藻」という画題の後に、「学牧溪和尚筆」と記し、線を用いない没骨法の描法は中国の宋時代の末に活躍した禅僧の画家、牧溪に倣ったと説明しています。鉄斎は牧溪芸術を高く評価し、最も詳しい伝記が収録された稀観本、「松齋梅譜」を所蔵していました。鉄斎が明治35年に美術雑誌「南宗画志」第四号に寄稿した論文、「僧牧溪の事」では、名品だけではなく、一見、粗放な作品においても、「酔興墨戲」の画趣に理解を示しており、鉄斎の牧溪観がうかがえます。

(中部義隆)

図2



図1



季刊 美のたより No.165

平成21年1月6日

発行 大和文華館